が、地域で一人暮らしをするのが夢だったんです。それで一人暮らしをする時に猛烈な反対があったんですが、一軒家を借りたんです。それで、自分でボランティアを捜してきて自分でローテーションを組んだりして僕一人で延べで五十人くらいのボランティアを集めました。家を借りる時に大家さんから障害者の一人暮らしには貸せないよといわれたんです。どうして貸せないんですかって聞いたら、家をよごされる・家をこわされる・火事になったらどうするっていうんですね。それで対応策を考えて、汚れないようにボランティアさんに徹底的に掃除をしてもらって、自分ではハンドクリーナーで掃除をしたりしてきれいにしました。それから玄関先で車椅子をおりて家の中に車椅子を持ち込まないようにしました。火の始末は全部電気の器具を使ったんです。エアコンとか電気カーペットを使ったり、電子レンジや電気ポットをつかったり、全部スイッチ一つでできるようにしたんです。そうすればよっぽど機械が故障しない限り火が出ることはありませんよね。一般の方が心配していることとっていうのは考えがしっかりしていれば克服できてしまうんです。そしていざ一人暮らしを始めてみたんですけれどボランティアさんがあれだけたくさん来れば何とかなるんですね。

＊　＊　＊　＊　＊

四年くらい一人暮らしをしたんですが、その中で地域の方々と顔をあわせて「おはようございます」って言えば、「おはようございます」って言うし、「あのーちょっともの を落としちゃったんでひろってもらえますか」って言えばひろってくれるし、障害者が実際生活してみてみんなと同じ地域に生きているんだよっていうことが誰かに言われることなく自然に伝わることが一番だと思うんです。障害者の人が側にいてちょっと困っとき手を貸してあげよう、声をかけてあげよう、そのちょっとのことで生活が成り立つかもしれない。それが知らず知らずのうちに地域の方々に広がっていって地域のネットワークができる。そう思います。

第四回介助ボランティア体験学習基調講演
自律生活へのサポート

やはり地域で生活することが大切だと思っています。障害者も地域の方にいろいろと教えられて育つ、地域の方も障害者の一言一言に耳を傾ける。共に育つという部分の良い教科書というか教訓というか事例というかそういうものになっていくんじゃないかと思うんです。

基調講演をする内海光雄氏

＊　＊　＊

私は電車で通勤しているんですね、駅で必ず駅員さんに前の扉を開いてもらってますし、勤め先の駅ではエスカレーターの乗り降りを手伝ってもらって出勤が可能になっているんです。日常生活でもさまざまな面で応援というかサポートをうけています。そこで初めて私という人間の生活の基盤というか生活が成り立っていく部分が自然にできてくるんですね、時間もかかるけどそれだけにしっかりしたものができると思います。

障害者が地域にいるってことはある意味では驚きなのかもしれないし、ある意味では拒絶反応を起こすかもしれない。でも逆にそういう人をサポートできる、みんなで応援できる、支え合えることができればその地域はかなりしっかりしたあたたかみのある地域になると思うんです。それで障害者の方が地域で生活するにはどんなサポートが必要かってことですが、これは一つの例として聞いて頂きたいんですが、障害者の人がお口の中をきれいにするっていうのはとても難しいことなんです。つまり習慣が必要ですよね。一回やったからといってこれから一か月、二か月やらなくてもいいってもんじゃな

いですよね、一日一回必ずみがかなくてはいけない。毎日持続しなくてはいけない。みがき方がまた難しい。皆さんも事情があって歯磨きが一日できない時ってありますよね、そうすると口の中がむかむかして気持ち悪いですよね、でもその後歯磨きするとすごいサッパリして気持ちいいですよね、あの感覚をあじあわせてあげたいんです。それはただやりなさいっていうよりは、効果から始める。やってあげるというんじゃなくて一緒にやろうよというふうに、実感を是非あじわってもらうことが一番いいと思う。

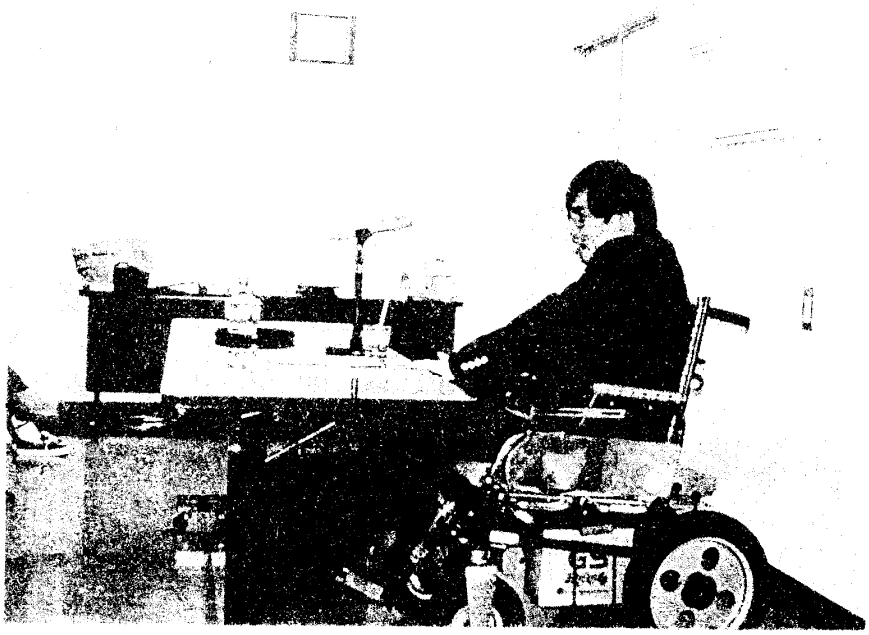
第四回介助ボランティア体験学習
基調講演

私は歯科コーディネーターをしているんですが、コーディネーターという職種はなんでも屋さんですから何でもかんでもやんなきゃいけないということがありますので、普段診療所の中を走り回って見回ったり、電話がしょっちゅういっぱいかかってきてとんで回ってあっちこっちにいったりで、そういうかたちの仕事ですから障害者の方が地域で生活をするのはとてもいいことだと思います。

変な言い方ですけれども、私も一種一級の手帳なんですよね、だから障害等級的には一番重いとされている等級なんで、私がここまでできるんだから寝たきりの方は別としてやろうと思えばもっとできるんじゃないかと。それにはただやんなさいってことじゃなくて、動機づけがうまくいってないんだから動機づけの部分をうまくやってあげればやる気もでてくるし、やらなきゃいけないと思うんじゃないかと最近そう思うんですね。その動機づけをどうしたらといつも悩みます。

障害者の人っていうのは特別なにかが必要なんだといつも言われてきて、そのために介助が必要だ、なにがひつようだとか、いつも言われてきて、たしかそういう部分の介助とかサポートって言うのは絶対必要で、それがないと生きていけないって部分はありますけれど、それだけに終始してしまうと、もう回りとか何も見えなくなってしまう。私がやってあげることにしろ私がせっかくやってあげたのにあんたなにやってんのって

言うことになりますよね、私がやってあげたことは無駄じゃないかと思いますよね。それはやってあげる側のはなしであって、やってもらう側のことを考えなくちゃいけない、やってもらう側もやってくれる方の立場を考えなくちゃいけない。そういうことがうまく合致すると人間関係がスムーズに行くと思うんです。それには情報量をどっちが持っているかということなんですけど、介助する側がいろんなところへ行ってますから情報量をたくさん持っているわけですね。街の中でもあそこだったらあの人は行けるんじゃないかとか、ちょっと手伝ってもらえばあの店だったら一緒に買い物に行けるんじゃないかとか、そういう情報を行った先の方に分けてあげる。



寝たきりの方だったら車椅子に乗れるか、車椅子にのるんだったらおしりが痛そうだから座布団がいると、じゃあどういう座布団がいいかと、僕は空気の座布団なんですが空気の座布団を使ったら痛くないかもしれない。時間も一時間ぐらいだったら車椅子に乗ってられるかもしれない。そうすれば家に行った時も車椅子に乗る訓練から始めようと、それができるようになったら一歩外に出て家の回りを散歩してみようと。そういう時にいきなり「やんなさい」って言わないで、じゃあ押してあげるから外の空気を吸ってみましょうよっていうかんじで楽しむ、楽しみながらその人がやる気を起こしていく。で、外ってこんなにすばらしいんだ、こんなにいいんだよってことがわかった上で、じゃ、一緒にやりましょうって言ったほうが僕はやる気が出ると思うんです。

＊　＊　＊　＊　＊

ここでどうやって一緒にや

っていくことだけ教えてあとは知らないよじゃなくて、教えただけの責任がありますから、後どうやったらその方が一緒に街に出て、買い物に行って帰ってきて、買い物の次はじゃあ今度はどこかでコンサートとか絵画を見に行こうとか、いうふうにつながってくると思うんです。それをどうやってサポートしよう、一人でできないからどうやってみんなでサポートしようって考えて行動してくれる。このへんがこれから地域福祉とよばれる部分で要求されてることだと思うし、私個人的にはそのへんをできれば考える看護婦さんなりボランティアさんになっていただきたいと思います。このへんは次に何につながるかというと、最初に言った、自分が誰かのために役に立つという部分に最終的につなげていただきたいと思うんです。で、なぜ私がそれを強調するかといいますと、私が診療所に勤めていて、二年半かかってやっと普通の人のように治療ができるようになった方のお母さんに「ありがとうございます」って言われた時ほんとうにうれしかったんです、「これで虫歯が一本もなくなりましたありがとうございます」って言われた時本当にうれしいです、どんな言葉よりうれしいです。

苦労してきて、その方が自分でやる気を起こして、できたことについてお手伝いができたことがとってもうれしいし、その方は私がやってあげたんじゃなくて、その方が自分でできるように手伝っただけのはなしであって、そういう経験を皆さんにもしていただきたいし、逆にさっき言ったように地域の中で一緒に生きるということを前提に考えれば、決してだけの世界じゃなくて、やってあげたことがバネになって、そのやってあげた障害者の方が、他に何かをやってあげられるように、もっていく、また、さがしてあげる、一緒にやっていくという部分。

福祉制度とか年金とかいろんな公的サービスがありますが、障害者の方が心から望んでるってことは、自分がどこかで役に立ちたい、自分を必要とされたい、という気持ちが、今、障害者の方のなか

第四回学習
体験
介助ボランティア
基調講演